

東京都周辺における外来種ワカケホンセイインコの食性

松永聡美¹・藤井 幹¹

Satomi MATSUNAGA and Takashi FUJII : Dietary preference of invasive Rose-ringed Parakeet *Psittacula krameri* manillensis around the Tokyo area

Abstract. The Rose-ringed Parakeet is an invasive species in Japan. Their place of origin is central southern India and Sri Lanka etc. In Japan, the Rose-ringed Parakeet was first recorded in Tokyo in 1969. Since then, Rose-ringed Parakeets have been observed all over Japan including Nagoya city in Aichi prefecture and Osaka. However, the Rose-ringed Parakeet population is declining. Currently, only three groups have survived in Japan. One is a collective group of individuals from Tokyo, Kanagawa prefecture and Saitama prefecture which has a population of more than 1,000. The other 2 groups are in Gunma prefecture and Chiba prefecture. These 2 populations are less than 100 individuals. We have researched and collected information of the collective group in Tokyo, Kanagawa prefecture and Saitama prefecture to find out the dietary preference of the Rose-ringed parakeet. As a result, we discovered that the Rose-ringed Parakeet was eating nectar, seeds and flower buds among various other sources. In addition, we believe the Rose-ringed parakeet change their distribution seasonally due to the availability of certain dietary sources. Also, based on received information, we believe their dietary spectrum has broadened due to their ability to forage on the ground.

Keywords: Rose-ringed Parakeet, invasive species, dietary preference, damage to agriculture

キーワード: ワカケホンセイインコ, 外来種, 食性, 農業被害

はじめに

ホンセイインコ *Psittacula krameri* はオウム目インコ科に属し (日本鳥学会 2012)、全身が黄緑色、嘴は赤色で、雄の成鳥は名前の通り頸に黒色とピンク色の輪がある。ペットとして世界各地に持ち込まれ、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、中東、北アメリカなど、様々な場所で野生化し繁殖が確認されている (Lever 2005)。日本では亜種ワカケホンセイインコ *P. k. manillensis* が 1960 年代のペットブームにより大量輸入され、それが逃げ出したことが野生化した原因として考えられ、野外では 1969 年に東京都で初記録された。その後、観察記録は北は新潟県の粟島から南は宮崎県のえびの市まで広がり、特に愛知県の名古屋市、大阪府、東京都などの都市周辺部では集団で生息して

いることが確認されていたが、現在では東京都、神奈川県、埼玉県の 1,000 羽を超える個体群と、千葉県、群馬県にそれぞれ 100 羽に満たない個体群が生息しているのみとなっている (日野 1990) 本種は現時点では特定外来生物には指定されておらず、目に見える形では生態系に大きな影響を及ぼしてはいないが、今後個体数や生態系への影響がどのように変動するかをモニタリングし、早期に発見、対応する必要がある。そのためには本種の食性を明らかにすることは重要な要素となるが、日本において本種が何を食べて一年を過ごすことができているのかは、まだ十分な報告がされていない。また、原産地では、一部で農作物への被害を出す害鳥とされているが、今後食性の変化に伴い日本において農業被害をもたらす懸念も少なくない。

1 : 日本鳥類保護連盟, 〒166-0012 東京都杉並区和田 3-54-5, 3F E-mail: matsunaga@jspb.org

そこで本研究では現在、日本において最も大きな個体群である東京都、神奈川県、埼玉県のグループに注目し、食性を明らかにするために一般者からの情報や調査によって蓄積してきたデータを取りまとめ整理すると共に、ここ数年の食性の変化によって懸念される問題についても交えて考察する。

調査地と方法

東京都、神奈川県、埼玉県の国内で最も大きなグループが分布するエリアにおいて、日本鳥類保護連盟に寄せられた一般者からの情報、東京工業大学に寄せられた情報、日本野鳥の会神奈川県支部のデータベースから採餌内容に関する情報をそれぞれ抽出したほか、本種の繁殖調査や分布調査の際、採餌行動に注目し記録するように努めた。また、夏季のように情報が少ない時期には採餌行動を観察するための調査を別途行い、採餌内容の情報収集に努めた。

結果

花蜜、種子、果実、葉芽など一年を通して幅広く植物質の餌を採餌していることが分かった (Table 1, Fig. 1-4)。季節ごとでは、春季はサクラの花蜜、そしてサクランボを採餌している情報、夏季は傾向は見られないものの木の葉芽を食べている情報のほか晩夏にはヒマワリの種子を、秋季はムクノキの実などの果実、冬季は餌台に飛来する情報が多く寄せられた。なお、冬季は種子や果実などの栄養分が高い餌が乏しいこともあり、2月に早咲きのカンヒザクラが開花するころには、局地的に分布するカンヒザクラの花蜜を求めて集中的に飛来する本種の情報が多く寄せられた。また、近年では地上から70 cm程度のマツバギクの葉肉やヒマワリの種子といった以前はあまり報告されていなかった地上付近の採餌行動や、冬季のミカン類、夏季の熟していない青いカキノキの実など、これまであまり採餌していなかったものを採餌している情報が寄せられるようになった。

考察

1. 採餌内容の傾向と国内に定着できた要因について

2月の初旬からカンヒザクラが開花し、その後4月中旬にかけて様々な種類のサクラの花が時期をずらしながら開花するが、本種はその開花の時期に合わせてサクラに集まっていることが、これまでの寄せられた



Fig.1 サクラの花蜜（左）とギンヨウアカシアの花（右）を採餌する



Fig.2 サクラの花に集団で集まる



Fig.3 ケヤキの葉芽を採餌する



Fig.4 熟していない青いカキノキの実を採餌する

Table 1 東京都を中心としたワカケホンセイインコのグループの食性

部位	目 名	科 名	種名・品種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	時期不明
花芽 (つばみ含む)	バラ	バラ	ウメ		○											
	バラ	バラ	サクラ		○											
	バラ	バラ	バラ		○											
	モクレン	モクレン	コブシ	○												
	モクレン	モクレン	ハクモクレン		○											
花蜜	バラ	バラ	アンズ			○										
	バラ	バラ	ウメ			○										
	バラ	バラ	サクラ		○	○	○									
花	キク	キク	ヒマワリ							○	○					
	ツツジ	ツバキ	サザンカ												○	
	ナデシコ	ハナミズナ	マツバギク													○
	フウチョウソウ	アブラナ	ブロッコリー		○											
	ブナ	カバノキ	アカシデ													○
	マメ	マメ	ギンヨウアカシア			○										
	モクレン	モクレン	ハクモクレン			○										
	モクレン	モクレン	ユリノキ					○								
葉芽	イチョウ	イチョウ	イチョウ				○									
	ツツジ	マタタビ	キウイフルーツ		○											
	バラ	ニレ	ケヤキ			○										
	バラ	ニレ	ハルニレ				○									
	バラ	バラ	サクラ					○								
	ムクロジ	ムクロジ	トウカエデ				○	○							○	
	モクレン	モクレン	ユリノキ						○							
	ヤマモガシ	スズカケノキ	ブラタナス				○	○								
葉	フウチョウソウ	アブラナ	ブロッコリー		○											
	ナデシコ	ハナミズナ	マツバギク					○								
	ビャクダン	ビャクダン	ヤドリギ				○									
葉柄	マメ	マメ	ニセアカシア												○	
茎	マメ	マメ	ニセアカシア										○			
穂先	イネ	イネ	タケ						○							
実	ヤシ	ヤシ	トウジュロ								○					
	スマレ	ウリ	カラスウリ												○	
	ツツジ	カキノキ	カキノキ	○						○	○		○		○	
	バラ	アサ	エノキ							○				○		
	バラ	アサ	ムクノキ		○								○	○		
	バラ	クワ	クワ					○								
	バラ	ニレ	ケヤキ								○				○	
	バラ	バラ	サクラ					○	○							
	バラ	バラ	ビワ					○								
	バラ	バラ	ブルーン							○						
	バラ	バラ	モモ						○							
	バラ	バラ	リンゴ							○		○				
	フトモモ	ミソハギ	サルスベリ					○								
	フトモモ	ミソハギ	ザクロ	○											○	
	ミズキ	ミズキ	ハナミズキ									○				
	ムクロジ	ミカン	カラスザンショウ	○											○	
	ムクロジ	ミカン	ミカン類	○												
	ムクロジ	ウルシ	ハゼノキ											○		
	モチノキ	モチノキ	クロガネモチ								○					
種子	マツ	ヒノキ	コノテガシワ													○
	マツ	ヒノキ	サワラ							○						
	マツ	ヒノキ	スギ							○						
	マツ	マツ	マツ											○		
	マメ	マメ	ギンヨウアカシア					○								
	マメ	マメ	ニセアカシア											○		
	マメ	マメ	パールアカシア					○								
	ブナ	ブナ	シイ												○	
	ブナ	ブナ	シラカシ											○		
餌台	ツバキ	ツバキ	ナツツバキ							○						
	キク	キク	ヒマワリ							○	○	○				
	イネ	イネ	アワ		○											
	イネ	イネ	米	○	○	○	○	○						○	○	
	マメ	マメ	ラッカセイ												○	
	キク	キク	ヒマワリ (種子)	○	○	○	○	○						○	○	
	バラ	バラ	リンゴ		○	○	○	○							○	

表1：東京都、神奈川県、埼玉県の個体群の一年間の食性

情報や調査結果から分かっており、サクラの花蜜への依存度が高いことが考えられた。また、冬季は各家庭において餌台への給餌が増えるが、それに合わせて餌台に飛来する情報も多くなる。餌台への飛来は人目に付きやすくなることも情報が多くなる要因ではあるが、この時期、調査においても餌台の周辺で見かけることが多くなり、他の餌を給餌している情報もほとんど入ってこないことから、その時期において餌台が重要な役割を果たしていることが示唆された。

日本において、各地に植えられているサクラと家庭における餌台への給餌は、本種が日本に定着できた要因となっていると考えられる。また、都市部では都市公園にビワやカキノキの実などの手つかずの果実が残されている状態が調査においても確認されており、冬季にカキノキの実を食べている情報が寄せられていることから、これらの残された果実も餌の少ない冬季を越せる要因になっていると思われる。

2. 農業被害について

以前はあまり報告されていなかった地上付近の採餌行動が近年観察されるようになったが、この採餌行動の変化により、今まで獲得できなかった餌資源を獲得することが可能になることが考えられ、今後食性の幅が広がることが予想される。また、採餌行動の変化に関わらない部分においても、冬季のミカン類や夏季の熟していない青いカキノキの実といった果実の採餌情報が近年報告されるようになった。このような果実の採餌、そして食性の幅の広がりは農業被害につながる可能性がある。現状では果樹には防鳥ネットを張っているところが多く、今のところ大きな農業被害は発生していない。しかし、一部では防鳥ネットを張っていないところもあるため、今後農業被害が広がる可能性も否定できない。そのため、今後の農業被害について動向をモニタリングする必要がある。

3. 葉、茎、葉柄の採餌について

植物の葉は、栄養分が少なく消化が悪いため、葉を常食とする鳥は限られている。ブロッコリー、マツバギク、ヤドリギの葉、ニセアカシアの茎、葉柄の採餌が報告されているが、ブロッコリーの葉は柔らかく、ヒヨドリの食害も報告されているおり、マツバギクは多肉質であるため二種は消化が可能と考えられる。しかしヤドリギの葉は革質で厚く、ニセアカシアの茎、

葉柄に関しては繊維質のため、消化が可能か疑問である。オウム目は知能が高く、好奇心が旺盛であることで知られており、採餌行動以外にも様々な物を齧っているところが観察されている。今回の報告においては、抽出した情報として掲載したが、ヤドリギの葉、ニセアカシアの茎、葉柄においては、採餌行動であったか今後確認する必要がある。

摘要

ホンセイインコはインド中南部やスリランカ原産の外来種で、野外では 1969 年に東京都で観察された記録が最も古く、その後、愛知県の名古屋市や大阪府など各地で記録されたが、現在では東京都、神奈川県、埼玉県の 1,000 羽を超えるグループと、群馬県、千葉県にそれぞれ 100 羽に満たないグループが存在しているのみである。本研究では、同じ個体群と考えられる東京都、神奈川県、埼玉県において、本種の食性を明らかにするため、一般者からの情報や調査によって蓄積してきたデータを取りまとめ整理した。その結果、花蜜、種子、新芽などを幅広く採餌しているが、時期により発生する餌とその分布が異なるため、その餌の発生に合わせて分布域を変化させていることが推測された。また、以前は報告されていなかった地上付近での採餌行動が近年観察されるようになり、食性の幅が変化していることが示唆された。

引用文献

- 日野圭一 (1990) 都市に見るふるさとの熱帯. アニマ 208: 20-24, 平凡社.
Lever, C.(2005) Naturalised Birds of the World. T & AD Poyser, Calton.
日本鳥学会 (2012) 日本鳥類目録改訂第 7 版. 日本鳥学会, 兵庫.